

会長の任期を終えて

石川哲也(理化学研究所放射光科学総合研究センター)

一昨年に村上洋一前会長からバトンを引き継ぎ、今般小杉信博現会長に無事バトンを渡すことができたのは、会員の皆様や評議員各位、また優秀な幹事諸兄のご支援のお陰であり、篤く御礼申し上げます。

この二年間、放射光学会や放射光科学を取り巻く風景がかなりの勢いで変化し、これに対応していくのが精一杯でした。会長就任時に変えるものは変えると息巻いてみたものの、主体的に変える前に周囲が勝手に変わってしまった感があります。

最初の大きな変化は、学会事務局が(有)ワーズからポラリス・セクレタリーズ・オフィスに交代したことでした。これは前の執行部で準備が進められたものを、実行に移したわけですが、特に大きな混乱もなく移行を完遂した関係者のご努力に大変感謝いたしますとともに、長年放射光学会のために労をお取りいただいたワーズの西野様に、心から御礼申し上げます。この事務局移行に伴い、予算・決算の進め方にいくつかの変更がございましたが、詳細は会計幹事から総会でご報告いたしました。また、移行期に学会誌発行時期の多少の遅れが生じたものの、会員各位の絶大なご協力と編集幹事・編集委員の皆さま方のご努力により、会誌原稿も順調に集まり、会誌発行が正常に戻ったことをご報告いたします。事務局交代にも拘わらず、佐藤亜己奈さんがワーズからポラリスに移籍してくださったため、会員から見た限りではすべてがほぼシームレスに移行できました。

事務局交代により、もっとも大きく変わったのは、年会・合同シンポジウムの進め方です。これについては、行事幹事から総会等で何度かご説明しておりますが、主催者を、各年の組織委員会とすることにより、懸念される諸問題を解消する方向での変更を進めました。平成28年には柏で、また平成29年には神戸で年会・合同シンポジウムを開催しましたが、いずれも組織委員会の皆さまや、とりわけ現地実行委員会の皆さま方の多大なご努力により、非常に素晴らしいものとなりました。関係者の皆さまに篤く御礼申し上げます。この二つの年会・合同シンポジウムとも会員各位の沢山のご参加を頂きますとともに、多くの企業から企業展示を出していただきましたことに、改めて御礼申し上げます。

学会として永年の懸案であった中規模放射光施設が会員諸兄の多大なご尽力により、実現に向けて動き出したことは本年年頭のご挨拶の中でも触れさせていただきました。

学会として提案した計画が、日本学術会議のマスタープランに推進すべき重点大型研究計画として位置づけられ、さらに文部科学省のロードマップにも取り上げられるところとなりました。並行して文部科学省・量子科学技術委員会の量子ビーム小委員会でも議論が進み、国の主体として量子科学技術研究機構(QST)が選定されました。そして、文部科学省から財務省に提出された概算要求中に少額ながらもスタート予算が計上されています。今後、具体的な検討が進められるものと思われませんが、オールジャパンでの取り組みが要請されていることから、本学会でも引き続き真剣な議論を続けて頂きたいと考えています。この一つのピースが確定しますと、国内での放射光科学全体としてのポートフォリオの在り方なども議論を開始することが可能となります。また今後他分野での意思決定が放射光分野に影響を及ぼす場面も出てくる場面もあるのではないかと考えています。いずれにせよ、学会として迅速な意思決定を迫られることは、従来に増して増えてくることが予想されますので、それに対応可能な仕組みづくりが必要ではないかと思われま

す。当学会の褒賞に関しては、従来「奨励賞」と「功労報賞」がありましたが、外部の賞への学会推薦時に「学会賞」受賞の有無を問われることも多く、これに対応するためにも本賞としての「学会賞」を整備することにいたしました。そして、昨年7月の評議員会で、その設立をお認め頂くとともに、三つの賞に対する内規の平仄を合わせる改訂を行いました。これらの賞の受賞者には、1月の年会・合同シンポジウムで表彰式を行い、また記念講演を行うことが恒例になっています。2016年の第20回奨励賞は、JASRI・XFEL利用研究推進室の片山哲夫さんと京都大学・産官学連携本部の河口智也さんが受賞されました。2017年の第21回奨励賞は、自然科学機構・分子科学研究所の上村洋平さんと北海道大学・電子科学研究所の木村隆志さんが受賞されました。受賞者の研究内容は、どれも素晴らしく、年寄が安心して引退を決意できる環境が整ったと感じましたが、残念ながら受賞に至らなかった応募者の皆さんの研究内容も受賞者に引けを取らず素晴らしいものが多数あったことが、非常に印象的でした。功労報賞に関しては、様々な議論があり、この2年間は該当者なしということにさせていただきました。

外部との連携活動として、男女共同参画や若手研究者のネットワークなどの活動が始まり、渉外幹事を中心に活発

な議論をしていただきました。2017年4月の評議員会で若手部会の設立が承認され、研究会の開催など様々な活動が開始されています。

会長退任後は、一会員として放射光科学および放射光学

会の発展のため、微力ではございますが何かの貢献ができたかと考えております。会員の皆様にはこの二年間絶大なご支援を頂いたことに、改めて御礼申し上げます。

庶務幹事を終えて

藤原明比古(関西学院大学)

2015年10月より石川会長体制で庶務幹事を務めさせていただきました。2年間任期の満了を迎えることができましたのも会長・幹事・評議員・事務局の皆様にご心強いご支援をいただいたこと、また、会員の皆様にご温かく見守っていただいたことによります。まずは、ご指導、ご鞭撻いただきました皆様に感謝申し上げます。

任期中、様々な取り組みがありました。任期前半には、学会事務局の移行、マスタープラン2017の提案、放射光科学賞の創設などが挙げられます。これらに関しては、学会誌 Vol. 29 No. 6 に掲載の「庶務幹事この一年」をご参照いただけたら幸いです。任期後半にも、学会内外の情勢を踏まえ、会長・評議員選挙のオンライン化、会員の休会制度の導入、年会・合同シンポジウム開催形式の検討、若手の会創設が行われました。これらの取り組みは担当幹事がイニシアティブをとりながら会長・担当外幹事・事務局が連携し整備されました。石川体制のチームワークの良さを認識した2年間でもありました。

庶務幹事としては、マスタープラン2017における重点大型研究計画への選定、文部科学省ロードマップ2017への申請・掲載が任期後半の特筆事項として挙げられます。放射光学会からの提案は、これまでもマスタープランの計

画として選定されておりました。しかしながら、予算請求権がある組織が実施場所を確保した上で提案することを前提とした文部科学省ロードマップへの掲載には乗り越えるべき課題も多く、ロードマップへの掲載は学会の永年の悲願でありました。今回のロードマップ2017への掲載は、これまで学会が積み上げてきた特別委員会等の議論や会員の皆様の各方面での高いアクティビティーが結実したものと理解しております。このような時期に庶務幹事として携わる機会を得たことは庶務幹事冥利に尽きます。

以上のように、2015年10月から2017年9月の2年間、学会内外の情勢、学会のあるべき姿を目指し、様々な取り組みがなされ、実現しました。一方で、任期後半より、学会のプレゼンスのさらなる向上を意識するようになりました。このきっかけになった案件は、外部の表彰等への推薦であります。学会には様々な賞や研究費への推薦依頼がありますが、これらの機会を十分に活用しきれなかったと反省しております。この点については、小杉次期会長体制に引き継ぐと共に、会員の皆様の積極的なご提案をお願いしたいと思います。今後は、2年間の貴重な体験も踏まえ、日本放射光学会の発展に貢献できるよう精進してまいります。2年間有難うございました。

行事幹事を終えて

矢代 航(東北大学多元物質科学研究所)

「草創と守成といずれか難き」というのは、唐の時代の「貞観政要」にある有名な問いですが、研究者の心を揺さぶるのは、やはり草創の方で、二年前、まもなく而立の年を迎えすでに守成の時代にある学会の、行事幹事という大役をお引き受けしたときは、正直に申しますと、どちらかというとながティブな気持ちで、きちんと責任を果たさなければ、という守りの意識ばかりだったのでございますが、この9月末に任期を終えるにあたって、この二年間

を振り返りますと、皆様のご協力のおかげで、少しばかりかは何か残せたかな、と思われるところです。

着任一年目の活動報告については昨年の「この一年」の記事に譲るとして、以下では二年目の活動報告をさせていただきます。まず若手研究会については、昨年は残念ながら応募件数がゼロでしたが、今年は1件の応募をいただきました。雨宮慶幸先生(東大)を委員長とする審査委員会による厳正な審査の結果、「最先端のパルス光で観る超

高速科学」(代表申請者：片山哲男氏 (JASRI)) が採択されました¹⁾。一方で、昨年の「この一年」でも述べましたが、近年、若手研究会の応募件数が減少傾向にあり、長期的な視点に立った問題解決のための取り組みとして、行事委員の若手のリーダーシップのもと、非公認ながら若手有志の会を立ち上げていただきました。この若手有志の会は、研究会開催などの活動実績が認められ、2017年4月の評議員会で、若手部会として正式に学会に承認されました。若手部会承認後も、日本学術会議若手アカデミー主催の第2回若手サミットにおける発表や、Web ページ²⁾の立ち上げ、若手有志研究会「マテリアルズインフォマティクスと分光」の開催など、積極的な活動が続いています³⁾。

第9回基礎講習会の報告については、別紙に譲りますが⁴⁾、今年は、69名の方々にお申しいただき、単独開催としてははじめての黒字化が実現できました。次回が10回目となりますが、放射光ビームライン光学技術に関する初心者向けの貴重な講習会として、今後も長期的に継続いただくことを願っております。

JSR2017については、実行委員会の後藤俊治委員長、木村洋昭副委員長、プログラム委員会の松下智裕委員長、熊坂崇副委員長のもとで、過去最大規模の年会・合同シンポジウムとなりました⁵⁾。学会予稿集の Web ダウンロード・html 閲覧化、ランチョンセミナーの導入など、さまざ

まな新しいアイデアが試みられ、企業展示については、関係者の方々のご尽力により、ブース数が史上最高の81件となりました。JSR2018からは、主催が日本放射光学会から JSR2018組織委員会に代わり、村上洋一実行委員長、清水伸隆副実行委員長、足立伸一プログラム委員長、木村正雄副プログラム委員長のもと、開催に向けた準備が鋭意進められています。

最後になりますが、第9回基礎講習会講師の先生方、第9回若手研究会審査委員会委員および主催者の皆様、JSR2017関係委員会メンバーの皆様、行事委員の皆様、そして何より石川哲也会長、幹事の皆様には、たいへんお世話になりました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。JSR2018関係委員会メンバーの皆様、学会事務局の皆様には、引き続きお世話になりますが、何卒よろしく御礼申し上げます。

- 1) 片山哲夫, 他：放射光 **30**, 285 (2017).
- 2) <http://www.jssrr.jp/wakatebukai/wakatebukai-j.html>
- 3) 和達大樹, 他：放射光 **30**, 240 (2017).
- 4) 矢代 航：放射光 **30**, 282 (2017).
- 5) 後藤俊治, 木村洋昭：放射光 **30**, 71 (2017).

編集幹事を終えて

吾郷日出夫(理化学研究所)

学会誌「放射光」を二年間無事に発行することができました。始めに、著者、査読者、編集委員、事務局の方々など、発行にご協力いただいた多くの皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

先ほど無事とは書きましたが、平成28年に発行の遅れが生じ、私として残念であり、かつ会員の皆様に申し訳なく思う事態もありました。その一方で私にとって嬉しいこともありました。その一つが、会員からの自由投稿記事を掲載できたという事です。昨年の「編集幹事この一年」に書きましたように、編集委員がカバーできる研究領域や研究成果の広がりには限界があります。読み応えがある上に、放射光コミュニティの動きをより反映した「放射光」の出版には、会員からの自由投稿や記事提案が大切であると考えています。自由投稿をお受けするにあたって、これまでにはなかった自由投稿原稿を掲載する手続きを編集委員会ですくなく定め直しました。科学的な内容が原著論文で担保された研究成果に関する通常の記事と異なり、自由投稿記事の査読は科学的な内容や新奇性等も含めることになり、「放

射光」の記事の査読としては辛いものになりました。このため、ご投稿いただいた方にはお手数をおかけすることになりました。より良い原稿に仕上げるためという目的をお酌み取りいただきご容赦いただきたく思います。

このほかには、私の任期限定の試みとして、「研究成果の紹介や解説ではないが、放射光利用者の実験環境に大きな影響を与えうる案件に関する記事」を原著論文がなくとも「展望」という記事の分類で掲載する環境を作り、これに沿って1件の記事を掲載できた事が挙げられます。ここでいう「放射光利用者の実験環境に大きな影響を与えうる案件」には、放射光施設の建設やアップグレード計画も含まれています。学会誌という位置付けでは、掲載する内容に偏重があってはなりません。放射光施設の建設やアップグレードが計画されている時期には、「新しい光」を創り出す側と、これに呼応して新しいサイエンスを展開する側の両方の「新しい光」に対する期待感を表明する場が必要であると思います。「放射光利用者の実験環境に大きな影響を与えうる案件」は、必ずしも放射光施設の建設やア

アップグレード計画だけではないと思います。今回の試みが今後の「放射光」の活用のあり方に何らかの影響を与えられ

るとすれば、大変嬉しい事です。

渉外幹事を終えて

雨宮健太(高エネルギー加速器研究機構)

2年間、渉外幹事を務めさせていただきましたが、任期を終えた今でも、「渉外業務とは何か」という問いに明確な答えは見つけられていません。とにかく目の前にある、渉外業務と呼べるかもしれない課題、に対応するという手探りの2年間でしたが、会長をはじめ、幹事会、事務局の皆様を支えていただき、なんとか務めることができました。明確な答えは見つからないとは言え、渉外業務の一つの目的は、他の学会、機関等に対し、放射光の認知度を高め、互いにメリットのある連携を行うことであると考え、様々な学協会との間で、各種イベントや講習会などを共催したり、協賛、後援をしたりという活動をしてきました。また、学会のホームページの管理も、渉外業務の一つとして行ってきました。任期を終えた今でも、学会のホームページの状況が気になって頻りにチェックしてしまったり、他学会のイベントがあると放射光学会が共催なのか協賛なのか後援なのか気になってしまったりするのは、一種の職業病かも知れません。

国際的な連携においては、この2年間の大きな変化として、アジア・オセアニア放射光フォーラム(AOFSRR)に関連するものが挙げられます。2015年度までSPRING-8がホストとなって9回開催されてきたChei-

ron Schoolが終了し、各国が持ち回りの形で開催する、AOF SR Schoolへと移行しました。第一回のSchoolはオーストラリアにて約1週間のスケジュールで開催され、40名以上の学生が参加しました。また、SRIのアジア版に相当する国際会議としてAO-SRIを3年に一度開催することが合意され、準備が進められています。

その他の取り組みとして、以前から内閣府の男女共同参画学協会連絡会にオブザーバ学会として参加しておりますが、近年、全国的に男女共同参画に対する意識が高まっております。昨年実施された男女共同参画に関する大規模アンケートでは、多くの会員の皆様にご協力いただきました。また、放射光学会内に若手部会が設立され、日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク分科会に参加することになりました。男女共同参画、若手部会ともに、学会のホームページに関連するイベント等の案内を掲載するページを開設しましたので、これらの活動をより活性化し、ネットワークを広げるためにご活用いただければと思います。

この2年間、たくさんの方々に大変お世話になりました。ありがとうございました。

会計幹事を終えて

渡部貴宏(高輝度光科学研究センター)

石川会長の下、2015年10月より2年間にわたり会計幹事を努めさせて頂きました。任期中は皆様にお世話になり、誠に有難うございました。

この2年間の会計業務は、事務局の移行という大きな出来事からスタートしました。これまで長年にわたりお世話になった有限会社ワーズが2016年2月に会社を閉じられることになり、新たに株式会社ポラリス・セクレタリーズ・オフィスに事務業務をお願いすることとなりました。この事務局移行の際は、移行後も学会の会計が健全に行えることを確認出来るか否かが1つの懸案事項でした。1つ

の可能性としては、大幅な出費増や移行に伴う若干の混乱もあり得ました。しかし、新旧事務局の方々の多大なご尽力、および会長・庶務幹事をはじめとする幹事や評議員の方々のご協力により、目立った混乱もなくスムーズに移行が行なわれ、約1年間の移行期間を経て学会の会計が概ね健全な状態であることが確認されました。事務局の方々をはじめ、皆様に深く感謝致します。

その他にも、会計業務に関わる変化が大小いくらかありました。年会・合同シンポジウムの運営に関わる会計の仕方の変更、学会誌等を印刷する業者への印刷費の支払い経

路の変更等が行われ、これらは総会等にてその都度審議、報告させて頂きました。これら1つ1つにおいても、事務局他、皆様に大変お世話になりました。

この2年間を振り返り、会計幹事という仕事をさせて頂いたことは幸いであったと感じています。2年間を通して、素晴らしい執行部や関係者の方々と一緒に仕事をさせて頂き、分野を越えて多くの方とお話させて頂いたり皆様の仕事を拝見させて頂いたことは刺激になり、興味深

いものでした。

放射光科学やその周辺を取り巻く国内外の状況がダイナミックに動いている中、広いスペクトルを持ったコミュニティを構成する1人1人のアクティビティがコヒーレント、インコヒーレントに重なり、将来のコミュニティを形作る布石となっているのだと思います。私も、なんらかの形で貢献出来るよう今後も努力する所存です。